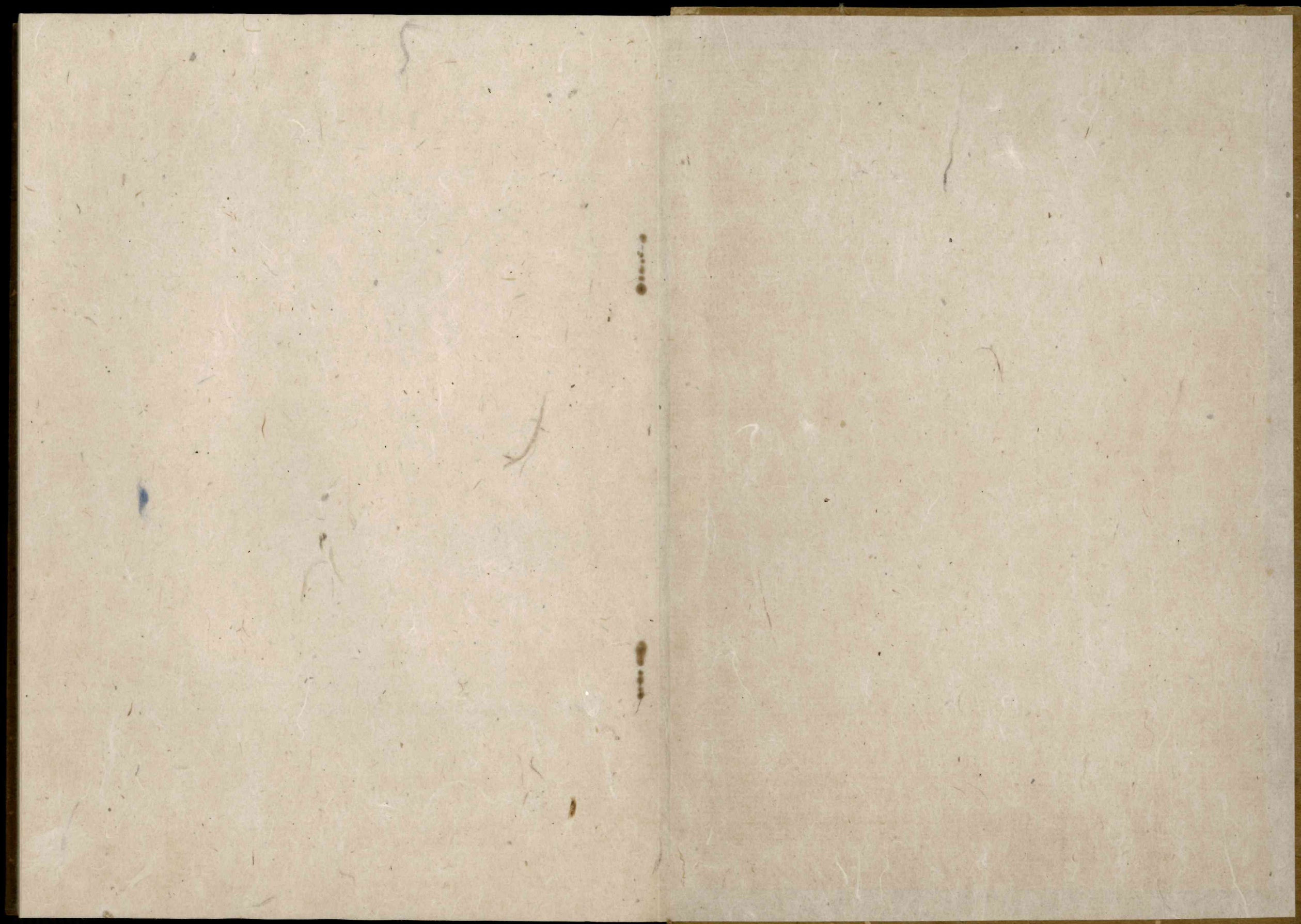


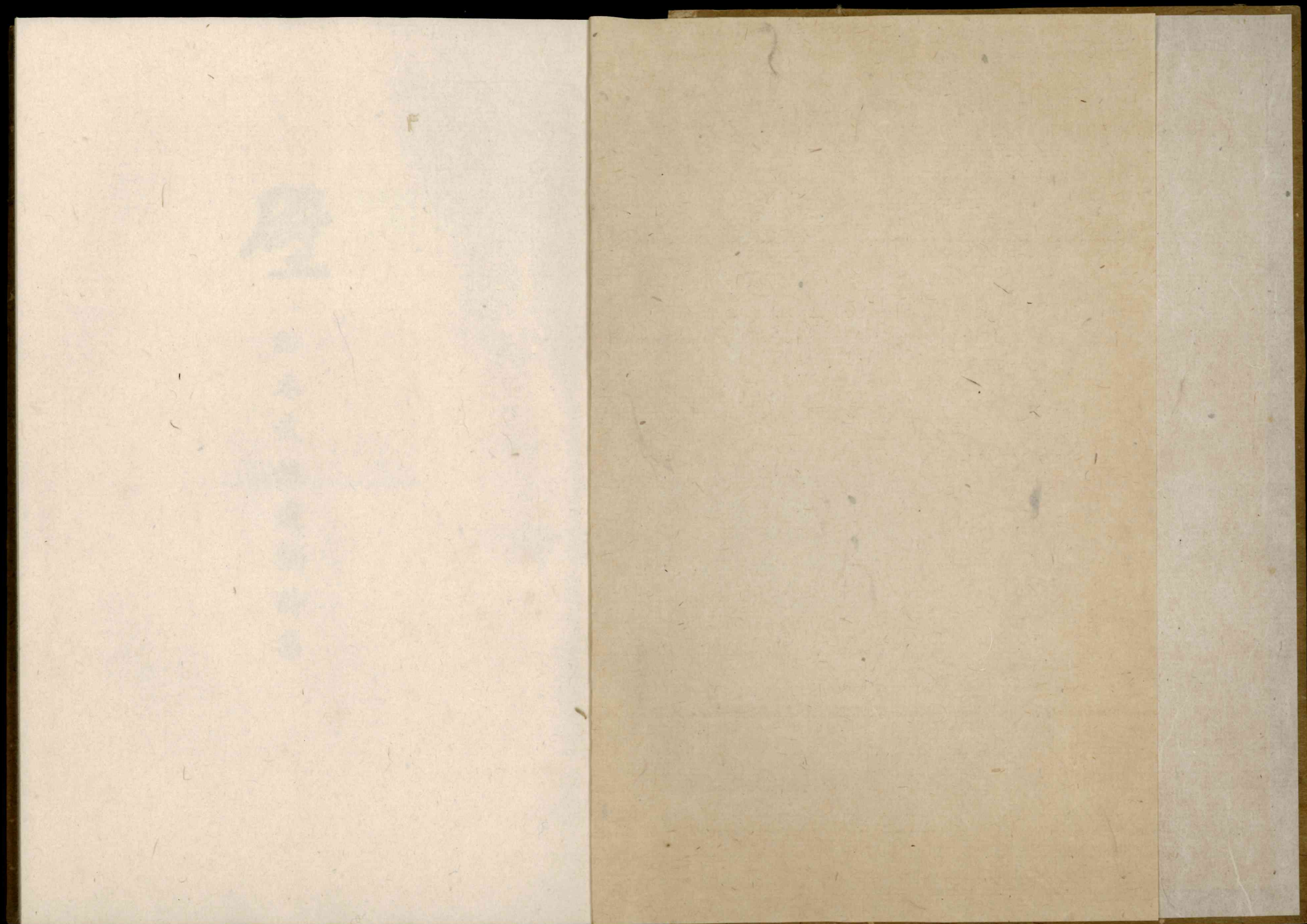
壁

遺稿
詩集

壁

鈴木武雄





壁

鈴木武雄遺稿詩集



(才九十)者作

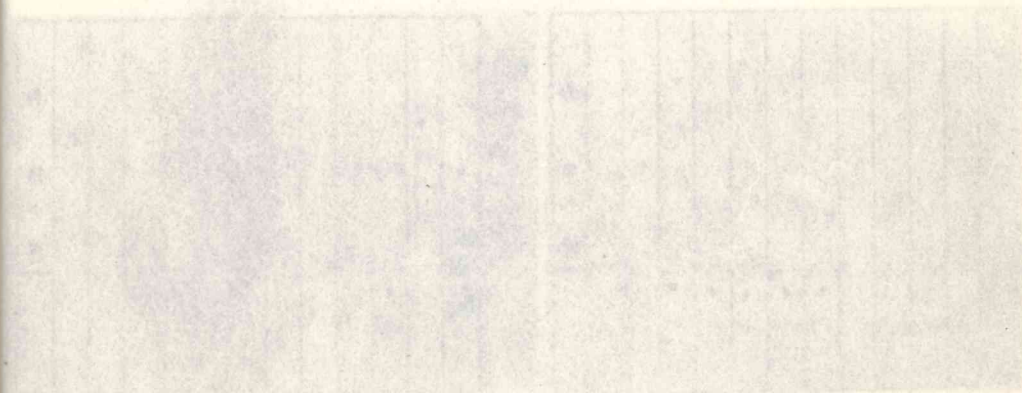
[illegible]

(りふ帳記日) 筆 絶

目次



第一卷 (1 至 10)



第二卷 (11 至 20)

目次

.....【寫眞】 肖像 遺筆.....

遺 壁 稿 10
みみす 13

.....カッ卜(作者自書)

いのち 16

ひめごと 18

珊瑚と珠をかゝげて 20

風 説 23

歪んだ抒情 26

山羊 28

無限像	30
駁る	32
見えない標的	34
指の環	36
夢のみち	38
汚された神話	42
耳の樹	44
挿話	46
作者略歴 作品年譜	49
あとがき	53

遺稿

壁

いもうとよ

今宵は二人分のランプをともしておくれ

ともしひかりの環

父も母もみな遠いそとにゐる

私たちには休息がない

わたしの胸の中でいつとは知れず失はれよう

花のよはひを傷ましくかぞへながら

私のかなしみは

わたしが悲しむだけでたくさんだ

いもうとよ

今宵は二人してみみずのなくのを聴いてゐようよ

壁の中から聞えるいかめしい父の聲と

母の涙と わたしの苦痛の額に
さらに新しきいましめを加へるのか

いもうとよ

壁の中から一諸に洩れてくるだらう

ひゆるひゆると

泣かないでおきき みみずのこゑだよ

みみず

泥を食つて生きてゐる奴
泥を食つて糞をする奴

よる夜中ひゆるひゆるとなく
誰にも知られずになく



畫自者作

いのち

蜜柑の花のかほりが

強すぎる樹のかげ

あなたはよく笑ふひとでした

聲もなく

語らうとする眼のいろを

私はたまらなくなしく思ふ

私はその言葉を聞こうとは思はない

去らうとする

嘆くまいとする

あゝ

私はつよく

自己の運命の上に立ち上らねばならない

ひめごと

胸奥に風を胎んで
スクーターが遠く駛る日
哀感はやたかな影をひいた
縁にあふれた思索は絶え
剔抉られた傳統が

葩のやうに散りゆき
愁情の眼はかすかに開いた
失意の官能を驅り
ミルク色に包まれた
底深い溫情のはなよ
扮装られた花籠の向ふに
意識の飛翔する寢姿よ
記憶が濡れてゐる
物語りの背景のやうに

珊瑚と珠をかかげて

珊瑚と珠をかかげて朝が来た
あんなに明るく　それほど眞面目に
乏しい灯の下にちつと身をひそませて　ひとりぼ
つちの淋しい物語りの中にくぐまつてゐた
杳かに流れてくるものは厳しく拒みつつけ　強ひ

られた表情には灰色めいた生活法の波をうたせた
いくつかの顔が消え　いくつかの言葉が置かれて
ゆく

でも闇には何のこたふるすべもなかつた
色を喪つて日の光は倒れ　星座たちの青春は傳説
のうへに墜ちたのだ

俺の周囲は　俺あるがためにいつも　つきること
のない悔恨にみちてゐる
さうだ遠くの青草に　しつとりと　身を埋めるが
いゝ

珊瑚と珠をにかけて乳色の未来が還つた
草わたる風のしづくに齒をあてれば 何ものか胸
の底ふかく絢爛と碎け散るものがあつた

風 説

いくつかの貝殻を握つて 街を歩いてゆく

視線は撒水夫の肩へ置き忘れて來た
その男は 歪んだ步調で丹念に歩き續けた
見ひらいた大きな眼に 青い影をひいて 何と縁

遠い人間だつたらう

ごみごみした河岸へ出た

はるかな日暮のあかるさがあつた

手を振ると 手の中で貝殻が鳴つた

俺をめぐつて 無数の羽音が立ちこめてゐる

耳の下で こちこちと貝殻をならした

俺は醜くむせんでゐた

貝殻はレストゲンの水盤へ そおつと沈めて歸つて來た

その夜も夢の中には 貝を拾つてゐる男がゐた

歪んだ抒情

いゝえ、それは違ふんです。それは思ひ過しといふものです。僕にとつて、これの擬態だとか虚飾だとかはいつでもよかつたんです。愛情のためだつたんですよ。いゝえ起きないでやつて下さい。これは何も知らないんです

から。僕等の仲間の誓ひだけ、守つてくれるんですから。ただこれが右手に壺をかゝげたまゝ、あの嫌な女神のやうな表情をつくつて、遠くの空を見てゐる、表白し切れない思想のために苦しんでゐるやうな眸、ただそれだけなんです。西印度の地圖が梵語で満たされないうちに、僕にもあいつの全部が判る時が来るんだらうと思ひます。それまでは、僕もこらへて旅をつゞけることにします。

山 羊

哀しい夢を見たのなら
僕にもそんな憶ひ出があつたよ
雲に憩んだ魚族のやうに
ベンの上に燃やしつづけた黄昏のやうに
山羊の眼よ

そんなに思ひが多いなら
意識の逞しさが さうまでお前を苦しめると言ふ
なら

しかし 柔和なそのすべてに
遠く駛る 季前の鋭感が
ゆたゆたと 背を流れる日もあるだらうに

無限像

こわごとと手に觸れて 私は愛情の方位を示した
暮色にただよつて はにかむである あらはな肩
など 背など
永いこと 私も とともに疲れてきた
かゝげた双の腕が 顔にくずれて

裾をひらいた花のやう
こんな夜など
うちに萎へた あらがひのこゝろさへ
やさしく 聴いてもやれたのに
身をかゝめ 夜ごとにまさぐり
すべてが還る日もあらうものと
やがて私は近づき かなしい私の位置に立つだ
らう

駛
る

うしなはれた 南の日
風のさはぎにひらいた たよりよ

花粉のゆくてに 消えてしまひ
思ひぶかげに 手さぐりながら

この杳い 愁ひのなか
ひとり をんなのいきづかひは
つゝましく 南方を教へたのだが

私は 私の方向に流れてゆき
思ひ入った様子などして 雄々しくも 昏くなつ
てゆく

見えない標的

銃身をめぐつて
つたない唄がこぼれはじめると
砲口がおびただしい血を噴いて
さぐりながら空間をめざした

私の中で膺懲の精神がちりちりに分解し
やがて血液のなかで形をととのへる
祖國が 草いさを衝いて
つぎつぎと わたしの葩を撒いてゆく
祖國が 私の周囲を凝視める
私は消えてゆきながらまだ生きてゐた

眞晝うつうつと城砦の夢を繰る
銃把の上に握つたお前の顔までが
かなしい思ひで死んでゐた

指の環

二つに組まれた指の環が
けさも私のまへではひらかうとしない
あの頃の　なんとほうぼうとした愛情だつたらう
青い靄の中から
小さな音楽が舌たらずにめぐり

私の歲月は　いつも孤獨でうしろ向きだ
ひらかれた寝顔のうへに
いまはすでに　私の信仰になつてゐる指の環が
蝶のやうに　貝のやうにとびかつてゐる
はるかに影を追ひやり
匍ひあがらうとする私の姿勢が
みじめにも花のやうにくずれてゆく
あの日のなさけを　小さく唇にとどめたまま

喪の みち

私たちは紫の雲の上に うつくしい小徑をあゆ
んだ

母よ 私はいくへにもあなたをとりまきながら

あをくゆたかな影をひいた

はなびらをしきつめた水色の小徑

風がくると はなびらを頭から浴びて 美しいか

ほりに濡れてしまふ

この暗い水色の小徑には いつもひとつしか影が
なかつた

この影はあなたのものです とあなたは小さく笑
つた

いまだにあなたのものにならなかつた まづしい
私のことばは
しかしやがてあなたの額を あかるくかざること
だらう
母よ
暗い小徑をあるいてゐれば
どこかであなたは そおつと私を抱いてくれそう
な氣がした

母よ
その時 あなたの腕の中で
私もともに あの頃の體溫をとり戻すだらうと思
つたのに

汚された神話

新しい神話が青い海を渡つて來たといふ
渚の砂のうへに おびただしい物語りがばら撒か
れた

西洋の神様はいつになつたら

あのよれよれの衣裳をすてるのだらう

かたはらの砂に繪を描きながら
私は杳い憶ひ出ばなしを始めた
神話のなかの裸婦たちは
乳房をかたくして耳をかたむけた
なんと若さと愛情にみちてゐたことだらう
私は風のやうに笑つてゐた

やがて泥のやうな深い睡りのなかで
あの神々のために
私の神話が汚されてゐるのを知つた

耳の樹

あたたかな日
私の耳の中から 樹の芽が小さく吹き出て来た
やがてやはらかい枝葉をつけ
白い花を咲かせては散らせた
美しいものでもない私の周囲に

小さな耳の樹はあたたかくたのしまれた
その頃から 眼を見ひらいたまゝ 夢を見ること
の自由を覺えた
そして私はかなしく眞晝を歩みつづけた
晴れた日 耳へ手をかざすと
白い花びらを散らせ 風の音が枝の先から美しく
聽えて来た
私は暗い眼をして 蟹のやうにうづまりながら
いつまでも 風の音に吹かれてゐたいと思つた

挿話

微風のやうに 葩が消え
遠いところで白い幕がひろがり
愛情にもられたさゝやかな風景

小さく握つた掌のなかで

ふたりの途惑つた決意が小さくふるへ
わたしたちの童話のうへに
やがてかなしい夢が舞ひ下りるだらう

海よ

海をこえた花花よ

はなやかに
わたしの願ひは 遠のいてゆく意志を繋ぐだらう

作者略歴・作品年譜

鈴木武雄略歴

大正四年（一歳） 七月十二日 東京府南多摩郡町田町原町田一二六九に、父魯一の次男として出生、四男二女の圓滿な商家の家庭に諸事順調な生ひ立ちであつた。

大正十一年（八歳） 四月 小學校に入學、卒業に至るまで學業成績優秀、身體も極めて頑健に見えた

昭和三年（十四歳） 三月 小學校卒業 四月 八王子市の東京府立第二商業學校へ入學。此の頃から後年の文學への關心が芽生えたらしく、同級會の雜誌等に文章が遣つてゐる。

昭和六年（十七歳） 當時四年生だつた商業學校の辯論部員として活躍すると共に土肥しぐれの筆名で詩、短歌等の夥しい創作に耽つた。蓋し、小學校以來の數人の親友、商業學校に於ける二三の同級生がいづれも熱烈な文學愛好者であり、關係した同人雜誌も二三に止まらず、それらの刺激に依るものであつた。此後四五年間と言ふものは此のグループの最も精進した時期である。

昭和七年（十八歳） 鮮滿地方を旅行。

昭和八年（十九歳） 三月 商業學校卒業。 五月 横濱市の神奈川區役所に勤務

十月 肋膜炎に罹り同所退勤。以後、家業を手傳ひつゝ療養に努めたが、商業に

は非常な熱意を示し、父母の信愛も深かつたので、それ丈に、之と併行して文學的生活を續けてゆく事は、ともすれば健康を損する由因となつた様である。

昭和九年（二十歳） 十二月同志と「多摩文學」を創刊、短歌雜誌「ぬはり」に入社した

昭和十年（二十一歳） 七月 徴兵検査を受け第一補充兵となる。「ぬはり」を退社詩に専念する。

昭和十一年（二十二歳） 一月 「多摩文學」第七輯に初めての短篇小説「別れ作」を發表。多摩文學廢刊。

昭和十二年（二十三歳） 毎月「日本詩壇」に詩を發表やうやく本格的な詩風に入つた

十月 再び健康を損じ病床生活に入る。

昭和十三年（二十四歳） 一月 再起不能を傳へられたが肉親の涙ぐましい看護により漸次快方に向ふ。

昭和十四年（二十五歳） 二月 年餘の療臥生活より恢復。此年二三の詩作がある。

十月 豫後靜療中を召集令下り、敢然入隊したが即日歸郷を命ぜられた。

昭和十五年（二十六歳） 愛知縣内海海岸、伊豆、伊香保等に轉地保養に努めた結果殆ど健康を恢復し今後の活躍が期待された處、十一月十一日 發熱、急性肺炎と診斷。十一月十四日、午後八時容體革まつて急逝。法名を明揚武徳居士と言ひ。金森山宗保院に葬る。

壁・作品年譜

題名	發表表	雜誌	發行年月日
いのちのち	多摩文學	第六輯	昭和十年十月一日
ひめごと	日本詩壇	第五卷第二號	全十二年三月一日
瑠々と珠を上げて	全	第五卷第四號	全五年五月一日
風	全	第五卷第五號	全六年六月一日
歪んだ抒情	全	第五卷第六號	全七年七月一日
山	全	第五卷第七號	全八年八月一日
無限	全	第五卷第八號	全九年九月一日
映	全	全	全
見えない標的	全	第五卷第十號	全十年十一月一日
指	詩と詩と詩	第二號	全十三年三月十八日
夷	全	創刊號	全十年二月一日
汚された神話	全	第二號	全十一年三月十八日
耳	日本詩壇	第六卷第一號	全十一年二月一日
挿話	香川詩壇	第二號	全十四年八月十日
みみず	(遺稿) 昭和十五年秋と推定さる 日記帳より發見		

あとがき

このさゝやかな詩集は、故人と最も親しくした九人の友、即ち、井上菊四郎、林一行、塚本正夫、山村武典、小島宏平、近藤誠、霜田竹次、平澤進八郎、守屋海助の手で故人の急逝後間もなく發議され、計畫されたものであつたが、その後思はぬ障害に遇つたりした爲に、今日漸く刊行の運びとなつた様な次第で、その點われわれとして甚だ慚愧に堪えぬものがあり、陰に陽にいろ／＼と御援助を賜りつゝこの刊行に非常な期待をかけて下さつた各方面の方々に對しても、心からお詫び申上度いと思ふのである。

さて、この詩集は、誰に見せる爲のものでもなく、たゞ、若くして逝いた彼、鈴木

武雄の、その秘かに燃えつゞけ、遂に燃え切つてしまつた美しい魂に對する、われわれのせめてもの手向として、故人の墓前に捧げる爲のものであり、次いでは、われわれ極く少數の親近者、即ち彼を愛し、或ひは彼に愛された父母兄弟その他の肉身及び近しい友人の手に、長く形見として保存したい念願に依るものである。

従つて、この十數篇の作品が、どの様な詩壇の反響を得るかといふ風な氣持は、夢にも持つてゐないし、又その方面の人々の眼に觸れるといふ様な事も恐らくはないであらう。だがこの事は、集中の作品の價値を正當に評價する時、人は惜しいと言ふかも知れない。蓋しその作中の幾篇かは、高い詩壇の批評にも充分堪え得るものであり、彼が秘かに刻苦し、遂に到達した最後の詩風といふものは、極めて眞率にして抒情の調べ高き、本質的な價値を持つものであつたからである。だが、酷薄な死の手はかゝる光榮された彼の藝術的發足を一夜に斷ち切り、われわれの彼に對する無限の期待も遂に據りどころなきものとなつてしまつた。

われわれが、この詩集をこの様な方法で刊行するといふ事も、かくの如く限らない未來性を持つた彼の作品を、永久にその未來の價値たらしめて置きたい希ひに依るものであつて、本集を世に問ふといふ事に依つて得らるべき些少の賞讃は、彼の爲にむしろ不本意とするからに外ならない。

思へば、餘りにもすみやかな時の移りではあつて、彼と過したあの華やかな青春時代も、彼の急逝を合圖とするかの様に、最早われわれの上に終つてゐるし、彼を葬つたその日からさへ、既にみたびの秋が深まつてゐるのである。

「生命ばかりが長く、希望ばかりが大きい。」アポリネールの言葉ではないが、彼なくして生きる我等が歲月の長さを、彼はどの様にして見守つてゐて呉れるであらうか。

限定百貳拾部の内

第 四二 册

昭和十七年十月二十五日印刷
昭和十七年十一月十四日發行

(非賣品)

著 者 鈴 木 武 雄

印刷所 東京府南多摩郡町田町原町田一〇五六番地
(東京一七四) 双 星 社

東京府南多摩郡町田町原町田一〇五六番地平澤方
發行所 鈴木武雄遺稿詩集刊行會

